

公立図書館の乳幼児サービスと育児支援

Child Care Support: Reading Promotion Activities for Infants by Public Libraries

山崎 洋子
YAMAZAKI Yoko

要 旨

ブックスタート事業をきっかけとして全国の市町村母子保健事業の中に定着してきた公立図書館と市町村保健師との協働活動の経緯とその意義について、全国への波及の基となった全国保健センター連合会モデル事業「親子ふれあい事業」の報告書などをもとに検討した。

図書館の乳幼児サービス担当者である司書と市町村母子保健事業担当者である保健師とは、全国保健センター連合会のモデル事業「親子ふれあい事業」の実施を通して、お互いの活動を知り合い、ブックスタート事業の実施に向けて協働した。

ブックスタート事業は、図書館司書や読み聞かせボランティアの住民などを地域の育児支援の協働者として位置づけ、市町村保健師が関与する母子保健分野におけるポピュレーションアプローチのひとつとなっている。

キーワード 公立図書館, ブックスタート事業, 母子保健活動, 保健師, 育児支援

Key Words Public Library, Bookstart, Infant-Child Care Activities, Public Health Nurse, Child Care Support

I. はじめに

近年、少子化対策として健やか親子21をはじめとして、次世代育成支援対策など子どもの健康と健やかな成長を保障するための施策が次々と打ち出されている。住民に最も身近な市町村母子保健分野においては、これらの施策の実行のためにこれまでの担当部局を超え、保健と福祉、保健と教育など新しい部局との協働活動が行われるようになってきた。

公立図書館もそうした時代の流れの中で、最近の子どもたちの活字離れや図書館の利用率の低下を食い止めるためだけでなく、地域の子育て文化に貢献するべく、新たなサービスとして乳幼児サービスに力を入れており、図書館内での活動のほかに保健センターや児童館に司書が出向いて「おはなし会」などを開き、積極的に育児支援に貢献しようとしている。

II. 公立図書館の現状

公立図書館の設置と運営は、図書館法(昭和25年)に

よって規定されている。「公立図書館児童サービス実態調査報告(1999年)」¹⁾の調査結果によれば、都道府県立図書館は66館、市区町村立図書館は2490館(1999年4月1日現在)であった。このうち、都道府県立図書館で館内で児童サービスを実施している図書館は51館(77.3%)で、サービスの内容は本の貸し出し、おはなし会、集会行事、参考業務・読書案内などであった。4都県(宮城、埼玉、東京、山梨)では、発刊された全児童図書をすべて購入していた。また、直接児童サービスを行っていた図書館職員のうち、児童専門職員は64人でそのうち55人が司書、司書補であった。

市区町村立図書館においては2490館のうち、2355館(94.6%)で児童サービスを実施していた。児童サービスのうち、最も多く実施されていたのは、おはなし会で、2026館(86.0%)で実施されていた。おはなし会の内容は、「絵本の読み聞かせ」、「紙芝居」、「ストーリーテリング」、「パネルシアター」、「手遊び」などである。また、これらの実施者は、「職員」(23.1%)の他、「職員とボランティア」(52.4%)、「ボランティアのみ」(20.1%)であり、市区町村立図書館における児童サービスにボランティアが多数導入されていることがわかる。

図書館の利用に障害のある児童へのサービスを実施している図書館が329館(14.0%)あり、資料貸し出しや出張おはなし会、対面朗読などを行っていた。また、他機関との関わりとして、出張おはなし会、定期的会合、ブックリストの共同作成などがあり、団体貸出は1810

受理日: 2009年01月19日

山梨大学大学院医学工学総合研究部

Interdisciplinary Graduate School of Medicine and Engineering, University of Yamanashi

館(76.9%)で実施され、学校・学級文庫や地域の子どもの文庫、幼稚園や保育園などへの貸し出しを実施していた。集会行事は、1720館(73.0%)で、映画会や人形劇が実施されており、市民に身近な市区町村立図書館において、幼児や児童向けに様々な文化芸術活動がなされていることがわかる。

1999年当時、全国の市町村の数は3500以上であり、すべての市町村に図書館が設置されていた状況ではない。また、児童担当職員4102人のうち、司書、司書補は2715人(66.2%)であり、図書館の専門家が配置されていない公立図書館も多い現状であった。

III. 図書館の乳幼児サービスの歴史的経過

図書館の子ども利用のピークは、1983年頃であったという。子どもの数の減少と共に、この頃を期に図書館の貸出総数のうちの子どもの貸し出し割合が50%を切り、2003年では20～30%となっている²⁾。子どもの塾通いや習い事で、子どもが多忙となり、小学校の高学年から減り始め、図書館に幼児が目立つようになった。1990年代では、小学校低学年のおおなし会が成立しなくなり、子どもの活字離れ、図書館離れが顕著になり、図書館の児童担当は、乳幼児を対象としたサービスをするようになっていった(大阪府立中央図書館司書の話)。

一方、1965年の母子保健法制定以降、保健師の母子保健活動で、障害児の早期発見と早期療育に向けた活動が各地で取り込まれ、その一環として、障害をもつ子どもにも本を読む機会を提供しようと、東京の一部の保健所で保健所文庫が始まった(東京、1983年)。保健所ならば、すべての子どもが乳幼児健診で保健所を利用するし、保健師や栄養士など、育児や発達に関する専門家も多い。N区では熱心な子どもの本の草の根の活動家と保健師が障害を持つ子どももそうでない子どもにもすべての子どもに絵本を読む機会をと、区内の全保健所に文庫が置かれるようになった。現在では、当時の母親たちが祖母の世代となり、孫たちに絵本の読み聞かせや布の絵本作りを実施している³⁾。

1988年には、児童図書館研究会で赤ちゃん絵本が取り上げられ、乳幼児を対象としたおおなし会が、全国各地で行われるようになった。大阪では、保育所や幼稚園の職員と図書館が絵本の勉強会をしたり、図書館が保健所に働きかけて、母親学級で絵本の話をしたり、育児学級でもプログラムに取り上げられ、図書館司書が講師で出向くところもあった¹⁾。また、新設された図書館が保健所や保健センターと隣接しているなど連携が取りやすい条件の地域では、1990年代の比較的早くから、母子保健事業に図書館を活用していた。

IV. 「子ども読書年」以降の公立図書館活動

1999年、2000年を「子ども読書年」とすることが国会で決議され、国立国会図書館、文部省、厚生省、通商産業省、内閣官房内閣外政審議室などが省庁を超えて、連携協力する体制がつくられた³⁾。また、民間団体を中心として、「子ども読書年」推進会議が発足した。2001年には、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が施行され、さらには、図書館法第18条(1950年)に基づいて、「公立図書館の設置および運営上の好ましい基準(文部科学省告示第132号)」が定められ、公立図書館の運営の基本やサービス内容について基準が明確となった。

この基準において、公立図書館は、サービス内容の目標を定めることや教育委員会が図書館職員の資質の向上を図ること、成人、児童・青少年、高齢者、障害者、外国人など利用者に応じたサービスの充実を図ること、住民の多様な学習機会の設定やボランティアの参加促進などに努めることが示された。また、図書館長は、司書であることが望ましいこと、学校図書館や社会教育施設との連携や人事交流をはかることなども定められた。

2002年には、「子どもの読書活動推進に関する基本的な計画(2002年から2006年)」が閣議決定され、家庭、地域、学校を通じた子どもが読書に親しむ機会の提供として、家庭教育に関する学習の機会等を通じた、親に対する読書の重要性の理解の促進、図書館等における子ども読書活動の推進、民間団体の活動の支援、図書館や公民館図書室など地域の読書環境の整備などが盛り込まれた。

その中でも、「家庭教育に関する学習機会等を通じた読書活動への理解の促進」において、市町村が実施する妊娠期、乳幼児期、思春期等の講座や育児支援の一環として公民館が行う読み聞かせなど、親子が触れ合う機会の提供を通じて、読み聞かせや読書の重要性の理解の促進を図ることとされたことは、図書館側からの乳幼児や児童に対する保健分野の活動への図書館職員の積極的な参加を促進するものであった。さらに、この法律において、公共性の高い民間団体の活動の支援や助成などが具体的に盛り込まれたことは、図書館ボランティアや読み聞かせボランティアの育成や活動の促進に直結しており、ブックスタート事業の拡大にも関連していると考えられる。

V. ブックスタート事業

日本におけるブックスタート事業は、2000年「子ども読書年」推進会議がイギリスから紹介した。イギリスでは、英語の識字率を向上させるための活動として発展

したが、日本においては、ことばや文字を教えるというよりも、「赤ちゃんと絵本を通じて親子で楽しいひと時を」をスローガンとして、親子のふれあいを強調した育児支援の方法として紹介された³⁾。その趣旨である『絵本がすべての子どもに提供され、それに専門家のサポートも加わる形で支えられることで、保護者が心にゆとりを持てる時間を作り出し、同時に子どもたちの生涯にわたるコミュニケーションの力や本の文化への関心を作り出す。』を運動の理念として、2000年11月杉並区、12月に北海道恵庭市でパイロットスタディが実施され、乳児でも絵本に興味を示すこと、保護者の絵本への興味関心を喚起することが示され⁴⁾、メディアを含む多くの関係者が注目した。

さらに、この運動を支えるNPOである『ブックスタート支援センター』も発足し、2001年、13市町村で初めてブックスタートが実施され、以降急速に全国に広まり、2008年12月には、全国で680以上の市町村が、ブックスタート支援センターの支援を受けてブックスタートを実施している。2000年の子ども読書年当時、3500あった市町村が、2006年では1800余になっていることから、全国の3分の1以上の市町村でブックスタートを実施していることになる。ブックスタート支援センターの支援を受けずに、独自に事業を実施している自治体も存在することから、ブックスタートは、市町村の育児支援の一方法として広がり、定着したといえよう。

基本的なブックスタートの実施方法は、乳幼児健診会場で図書館司書やボランティアが絵本の読み聞かせを実演しながら、発達に応じた絵本を紹介し、絵本をプレゼントするほか、図書館の利用案内や母子保健事業の紹介、地域の育児支援に関連した情報提供や育児サークルの紹介など、地域の子育ての実情に合わせ、市町村が図書館と創意工夫して育児支援を行うものである⁵⁾。

図書館年報(2003年)によれば、「子どもの読書活動の推進に関する法律」の制定以降、全国の公立図書館では、子どもの読書推進計画が策定されることとなり、公立図書館の乳幼児サービスは、計画的に推進されつつある。

VI. 全国保健センター連合会「親子ふれあい事業」

ブックスタートが全国に広まったきっかけとなったのが、平成13年度と平成14年度に全国保健センター連合会がモデル事業として全国の市町村保健センターで実施した「親子ふれあい事業」であった⁶⁾⁷⁾。

これは、全国保健センター連合会が「健やか親子21」推進の一環として、子育て支援基金の助成を受けて実

施したもので、全国保健センター連合会が地域の子育て支援の拠点として大きな責任を担う全国の保健センターに呼びかけ、

① 乳児健診に「絵本コーナー」を設け、保健師などとともに図書館司書、読み聞かせボランティア、育児ボランティアなどにより、赤ちゃん和絵本の講話、読み聞かせ、地域の育児などの関連施設の紹介を行う。

② 事業を進めるために、関係者連絡会を設ける。

を条件に平成13年度32ヶ所、平成14年度60ヶ所の市町村に、絵本や備品の購入のため、15万円の予算を配分するというものであった。

事業の目的は、子どもの心の健康づくりとして絵本をツールとして用いることで親子のコミュニケーションを豊かにすることとされ、全国の乳幼児のほとんどが受診する乳幼児健診の場で、絵本の読み聞かせの意義や実際の読み聞かせを親子で体験してもらい、保護者が絵本を通じて子どもと楽しい時間を持つことを目標としている。

VII. モデル事業実施後の公立図書館と市町村母子保健活動との連携

平成13、14年度に「親子ふれあい事業」を実施した92市町村のうち、関係者連絡会あるいはモデル事業実施時に図書館あるいは図書館司書、公民館図書室職員が参加していたのは、65市町村(70.7%)であった。図書館等の参加がなかった27市町村では、絵本の読み聞かせ、あるいは絵本の紹介を児童館職員、保育所保育士、読み聞かせボランティア、保健師が行っていた。人口が一万人以下の町村の中には、公立図書館のない自治体もあり、本モデル事業を実施するにあたり、市町村保健師がそれまでの活動の中で情報を得た既存の資源を有効に活用している様子がうかがえる。

モデル事業の企画・実施を通じて、保健師は育児支援に関係する保健分野以外の行政部門(図書館、教育委員会、公民館、保育所、児童家庭課など)や民生委員、母子保健推進員、愛育会、読み聞かせボランティアなどの住民に呼びかけ、事業への理解と協力を要請していた。また、モデル事業で条件とされた関係者連絡会を既存の子育て支援連絡協議会や母子保健推進協議会の中で実施して、関係者の理解や周知徹底を図った市町村や事業実施後の事業化やその継続を図るために、モデル事業を母子保健計画の中に絵本を媒体とした育児支援事業として取り入れた市町村があった。

モデル事業の実施後も乳幼児健診や育児教室に継続して絵本の読み聞かせを取り入れようとしていたのは55市町村(59.8%)で、このうち18市町村では、新年度でブックスタート事業の実施を計画していた。

報告書の記載から、モデル事業を継続的な図書館との協働活動へと発展させようと意図していることがうかがえる市町村も多かった。当時の公立図書館においては、子ども読書年を契機として乳幼児サービスを拡大充実しようとする機運が高まっており、中には、図書館職員のほうから市町村保健師に乳幼児健診での読み聞かせの実施や妊婦教室での絵本や読み聞かせに関する講話の実施などを働きかけた市町村もあった。

「親子ふれあい事業」実施の成果として、保健師からは図書館司書や絵本の読み聞かせボランティアが乳幼児健診の場に加わることで、地域の子育てを見守る図書館員や住民の存在が親子にアピールされ、保健師と異なる視点で育児中の親子を支援することができることや待合の時間などに絵本の読み聞かせを取り入れることで健診の場が和み、受診する保護者も健診の時間を落ち着いてゆったりと過ごせること、絵本に反応を示す乳幼児の表情を保護者がよく捉え、子どもの反応を図書館司書や保健師、ボランティアなどと共に喜ぶ光景が見られることなど、これまでの乳幼児健診では表出されにくかった保護者の表情や気持ちが表出され、受診者の満足感が得られることなどがあげられた。さらに図書館員も通常の図書館業務とは違う育児支援という目的を再確認して事業に参画し、図書館側は、図書館の利用率が上昇したことを評価していた。ある保健師は、「健診に絵本を一冊プレゼントするだけで、乳児にも親にもその兄弟や祖父母にも保健センターや保健師の存在を知らせ、住民に働きかけられるととても効率のよい育児支援活動になる。」といい、他の母子保健事業にも絵本の読み聞かせや絵本の紹介を取り入れる計画を立案していた。

VIII. 現在の公立図書館の乳幼児サービスと母子保健事業

子ども読書年にはじまったブックスタート事業は、ブックスタート支援センターのバックアップを受けて確実に全国に広がった。また、図書館司書や公民館職員など、これまで保健師があまり関与してこなかった行政の関係者を母子保健活動の協力者として位置づけることになったことや地域の子どもの健やかな成長を願う読み聞かせボランティアや関係市民との協働活動を通じて、地域の子育て支援のネットワークを広げることに貢献していた。このことは、母子保健活動推進におけるポピュレーションアプローチのひとつと考えられる。

公立図書館においては、乳幼児を連れた保護者が利用しやすいように絵本や児童書を集め、子どもの目線で図書が探せるような配架棚の工夫やじゅうたん張り

のフロアで親子がゆったり絵本を楽しむことができるような工夫など、小さな子どもを持つ保護者が利用しやすい環境が整備されるようになり、乳幼児の利用を排除していた時代とは乳幼児とその保護者に対する対応が全く異なっている。また、乳幼児向けのお話し会や読み聞かせ講座、絵本作家の講演会などが頻繁に開催され、公立図書館を拠点とした地域の育児文化の拠点が形成されつつある。

IX. まとめ

地域のつながりが薄れ、少子化が進み、子育て・子育てに困難感を感じている保護者が増える中で、ブックスタート事業をきっかけとした公立図書館の母子保健活動分野への参与は、行政の育児支援における保健分野と教育分野の協働という新しい活動を生み出していた。これらの新しい協働活動が各地の市町村で創出され、定着するには、乳幼児とその保護者に対し、母子保健事業を企画し、直接サービスを提供する立場にある市町村保健師の柔軟な発想と企画力、関係者とのコミュニケーション力が必要とされていた。

核家族化で育児文化が継承されなくなったといわれて久しいが、公立図書館は地域の文化形成の拠点でもある⁸⁾。少子化時代の市町村母子保健活動においては、地域の子どもの健やかな成長と発達を願う市民や図書館など関係者たちの協力を得て地域のネットワークを広げ、子育て支援活動が地域の子育て文化の形成にもつながる大事な活動であることを認識することが重要である。

文献

- 1) 日本図書館協会児童青少年委員会(1999) 公立図書館児童サービス実態調査報告：日本の図書館付帯調査。日本図書館協会，東京。
- 2) 日本図書館協会(2007) 図書館年鑑 2006 統計編。図書館協会，東京。
- 3) 渡辺順子(2008) ことばの喜び・絵本の力。萌文社，東京。
- 4) ブックスタート支援センター(2001) ブックスタートパイロットスタディ 4ヶ月児調査概要。ブックスタート支援センター，東京。
- 5) 特定非営利活動法人ブックスタート(2008) ブックスタートハンドブック第5版，東京。
- 6) 全国保健センター連合会(2001) 平成13年度絵本と出会う・親子ふれあい事業報告書。東京。
- 7) 全国保健センター連合会(2002) 平成14年度絵本と出会う・親子ふれあい事業報告書。東京。
- 8) 日本図書館協会(1995) ユネスコ公共図書館宣言。図書館雑誌，89(4)：254-255。